

ジェノヴェージ〈エコノミア・チヴィーレ〉の生成

奥田 敬(甲南大学)

◆〈エコノミア・チヴィーレ〉の現在

《形而上学者から商人へ》と韜晦しつつ 1754 年から開始されたアントニオ・ジェノヴェージ(1713-69)の「商業と機械学」の講義は、マキアヴェッリの天才をもっても時代の制約ゆえに説き及べなかった新たな《経済的理性の学校 *scuola di ragion economica*》として南イタリアの「勤勉な若者たち *studiosa gioventù*」を魅了し(cf.奥田 2006, p.396)、19 世紀初頭まで一 当否はさておき— 「世界で最初の経済学講座」として全欧的にも認知されていた(奥田 2003a, p.12)。だが、啓蒙のコスモポリタニズムが屈折したナポレオン時代には「社会科学におけるガリレオ」にも擬えられたジェノヴェージも、《経済学 *economia pubblica* は祖国愛の科学》と標榜したリソルジメント期の反体制知識人たちからは偶像視され続けたものの、その主著『商業講義』の教科書としての命数はイタリア統一とともに尽き、《生まれながらに老衰した書物》(フェッラーラ)とさえ烙印を押された(cf.奥田 1986-87, p.60)。

それからほぼ一世紀を闊した 20 世紀半ばには、「経済学講座」創設 200 周年に際してジェノヴェージを顕彰する論文集(AA.VV. 1956)も刊行されたが、これは殆ど国内的な行事に留まった。ところが 21 世紀を迎えての 250 周年記念では様相が大きく変わった。英国・オランダ・スペイン・アルゼンチンからの報告者も交えたシンポジウム(AA.VV. 2007)の開催に合わせて、永らく待望された— 未刊の「講義録」草稿も含む— 『商業講義』の校訂版(Genovesi 2005)がついに上梓され、その対をなす— 大部分が従来未刊の— ジェノヴェージ遺稿集(Genovesi 2008a)も追って出版された。

こうした復活の気運はまた、一方ではフランコ・ヴェントゥーリ(1914-94)に牽引された第二次大戦後のイタリアの啓蒙思想史研究が漸く英語圏でも本格的な反響(Robertson 1992)を呼ぶに至ったことによって、他方では近年興隆の目覚ましい進化経済学や行動経済学の潮流における「人的資本」「社会資本」といった視角からの関心の高まり(Perrotta 2004)とによって後押しされている。その具体的な事例を挙げよう。

一方の動向の代表格ともいえるロバートソンは、《ヒュームのおかげでスコットランド人たちはついに、相方のナポリ人たちに追いつき、近代エピクロス主義の挑戦に直面した》(Robertson 2005, p.145)と判定した上で、18 世紀半ばのヨーロッパ世界の南北の両端に踵を接して到来した「経済学 *political economy*」に《国民的コンテクストを超えて》人間の条件の改善に努めたコスモポリタニ的な知的・政治的運動としての「啓蒙のアイデンティティの核心」を見定めようとする(Robertson 1997, p.672)。これは、ポーコックが主唱する「複数の啓蒙」観への果敢な挑戦でもある。

他方の経済学プロパーからの注目は、イタリア経済思想における「公共の福祉(*pubblica felicità*)」の伝統の再評価につながる。その典型は、英語での発信にも精力的な新世代の研究者のうちでも異彩を放っているブルーニであろう。《19 世紀の歴史家たちは、classical “happy” Italian Civil Economy を“wealthy” English Political Economy に対置するのが通例であった》(Bruni 2006, p.46)。ジェノヴェージは「信頼 *trust*」を「市場」の前提ととらえたが、スミスはそれを結果ととらえた。だが、両者とも人文主義の伝統に根ざして、徳のある人間関係(友情)こそ幸福と考え、その実現の場としての「市民社会」を市場に重ね合わせた点では共通する。違いはただ、友情が拡大して市場が形成されるか、市場があって初めてその外部に友情が生まれるかというだけに過ぎない(*Id.*, pp.87-88)。このように、幸福をなおざりにして富の追究に偏倚した、19 世紀後半以降の功利主義的な主流派経済学に疑問が投げられる。ここには、「市場」での〈交換→効率〉や「政府」による〈再分配→公平〉に留まらない、NGO や NPO 等の「第 3 セクター」に具現される〈互酬性→幸福〉の領域としての「市民社会(結社)」をも包括した〈経済学 *economia civile*〉の再生という企図(Bruni & Zamagni, 2004)も秘められている。

もちろん、ジェノヴェージとその経済思想だけが脚光を浴びているわけではない。ヴェ

ントゥーリの最大の後継者と目されるフェッローネが《ヨーロッパ自然法思想を理論的發展の最高度にまでもたらしめた》とまで絶賛するのは、ガエターノ・フィランジェーリ(1752-88)の『立法の科学』(1780-91)である。18世紀ナポリの思想家たちは、やがて《個人的自由を最優先する見えざる手のユートピア》としてイタリア北部にまで蔓延する《市民生活の露骨な功利主義的理解》に対抗して、《古代の自由と近代の自由との微妙な立憲的均衡への配慮を通じて、より公正で平等な社会への道を開こうする啓蒙のユートピア》を構想した。だが、ここでもまた、その真骨頂をなす「人間の権利」という理念の淵源は、《相互扶助の権利 *reciproco dritto ad esser soccorso*》によってキケロ的・ストア的な共和主義を刷新したジェノヴェージに帰される(Ferrone 2003)。かくして、『商業講義』と並行して晩年の彼が心血を注いだ『正義論』(1766-71)の新校訂版(Genovesi 2008b)も実現した。

端なくも輻輳した諸説はさしずめ、功利主義と啓蒙とは経済学において融合する(ロバートソン)／分極する(ブルーニ)／決別する(フェッローネ)とでも要約できようが、性急な断案は控えよう。《Economia Civile》はさしたる違和もなく《Civil Economy》として通用するのかもしれないが、そこで見逃されてしまうものはないか？ 以下は、〈エコノミーア・チヴィーレ〉という概念の来歴と、その外延と内包を明らかにする作業の仮報告である。

◆〈商業の歴史〉から〈市民の経済〉へ

ジェノヴェージの経済思想の初発の形姿を偲ばせるのは、1754年11月5日の開講の辞を敷衍したとも覚しい— ただし、実際の執筆時期は不明(カンティロン『商業試論』に言及されているので1756年頃か?)— 「商業汎論」(奥田1992)だが、そこで彼が鼓吹する新しい学問の呼称とされているのは、端的に講座名どおりの「商業の科学 *scienza del commercio*」(4例)である。「商業および経済の科学 *scienza del commercio e dell'economia*」「経済の科学 *scienza dell'economia*」「経済科学 *scienza economica*」「経済哲学 *filosofia economica*」「商業の学(技術) *arte del commercio*」といった言い回しも各1例ずつ用いられている。「商売の実践 *pratica della mercatura*」と峻別する際には「商業の政治科学 *scienza politica del commercio*」や「諸国家の経済科学 *scienza economica degli Stati*」とも表現されるが、「政治経済 *economia politica*」(6例)という用例が意味するのは、むしろこの学問の対象領域の側であって、学問分野そのものを明確に指示するのは1度だけである。

この原書にして102頁程の小冊子(Genovesi 1984, pp.119-163)— 末尾に《第1冊の終わり》という不可解な文字が印刷されているため、抜刷的な先行出版の可能性も排除しきれぬのだが、現物は確認されていない— を解題的な序説として収録したケアリー原著・ビュートル-デュモン翻案の『イングランド商業の現状』のイタリア語版『大ブリテン商業史』は1757-58年に刊行されたが、同じ頃ジェノヴェージは『商業原論 *Elementi del commercio*』と総称される講義録の草稿を残している。タイトルから直ちに想起されるのはフォルボネ(1722-1800)の『商業要論 *Éléments du commerce*』(1754)であり、実際その影響は大きいのだが、2巻本全12章の『要論』に比べて『原論』の章立てはもっと細かく、しかも2部構成である。第1部は「商業の経済について *Dell'economia del commercio*」と題され、14章282頁で、末尾に《1757年6月6日終了》の日付がある。第2部は「商業の要論について、あるいは公共経済について *Degli elementi del commercio o sia della pubblica economia*」と題され、14章に加えて補論があり298頁、末尾の日付は《1758年6月10日終了》である。第1部冒頭の「序文」によれば、第1部は《あらゆる意味における公共経済 *la economia pubblica in tutta la sua estensione*》を論じ、第2部は《商業と経済に属する些か抽象的な事柄 *le cose un po' più astratte appartenenti al commerce e all'economia*》を論じる。すなわち、第1部がまず商業の本質と重要性から説き起こして、その歴史とナポリ王国における現状を検討した後、外国貿易の振興策— フォルボネを下敷きにしており『商業汎論』の最終節とほぼ同文— を示し、さらに人口・勤労・奢侈といった対象を取り扱って、農業改良の新技术の紹介で終わるのに対し、第2部で取り上げられるのは、価値と価格・貨幣・信用などに関連した諸問題である。

こうした2部構成は刊本(初版1765-67; 第2版1768-70)の『商業講義』全2巻にも引き継がれるが、第2巻が全13章プラス補論と結語で— 後述する重大な一点を除いては— ほとんど章立ても変わらず本文361頁(第2版)であるのに対し、第1巻は大幅に増補されて

全 22 章となり 543 頁にも達しただけでなく、面目を一新させるほどに改編された。つまり、商業から技芸へという『商業原論』の展開が逆転して、ナポリ王国の現状認識で締め括られることによって、「勤労 *industria*」を軸とした〈国民経済〉形成論という構造が明確になったのである。だが何よりも重視すべきは、「政治体 *corpo politico*」(≒国家)ないし「市民体 *corpo civile*」(≒社会)の成り立ちを論じた 4 つの章が冒頭に据えられたことであろう。言うまでもなく、そこでは同時期の『正義論』と重なり合う議論が繰り広げられるのだが、『正義論』の出発点が「人間の本質(自然)*natura dell'uomo*、世界の法則 *legge del mondo*、普遍的な義務 *doveri generali*」(第 1 巻第 1 章)であったことを思い合わせるなら、ジェノヴェージは並列的に〈人間的生活 *vita umana*〉と〈市民的生活 *vita civile*〉のあるべき姿を問おうとする双副対の書を著そうとしたとも言えそうである。もちろん、この場合の〈市民〉とは、かつて活躍したような、あるいはやがて再び登場するような〈政治人〉としての「公民」ではなく、あくまでも〈文明 *civiltà*〉の現段階としての「商業」の担い手たる〈経済人〉に過ぎない。しかし、このように考えたとき初めて、ジェノヴェージが《商業あるいはエコノミーア・チヴィーレ》と言い換えた含意もすんなりと(?)了解できるように思われるのだが、いかがであろうか。

いずれにせよ、かつてジェノヴェージは『大ブリテン商業史』を世に問うにあたり、劈頭の「総序」で、歴史の研究が目標とするのは《社会にとって最も必要な市民の哲学 *filosofia civile*》にほかならないと読者に訴えた— 『商業講義』がその自らの実践であることは間違いない。彼なりに「商業の科学」の体系化を成し遂げたとき、ジェノヴェージはそれ〈市民の経済〉という名を与えたのである。

◆〈調整者としての君主〉

では、〈エコノミーア・チヴィーレ〉という呼称は実際どのように用いられているのか。まずは『商業講義』(第 2 版)第 1 巻の「序文」の冒頭段落の全文を掲げておこう。

全ての「学問 *Scienze*」は有用であり、熱心に育成されるに値する。いずれも、人間の生活 *vita umana* とそのあらゆる善 *bene* の最初にして主要な道具であるところの理性 *ragione* の蓄積を増進かつ洗練させるべく秩序づけられたものであるから。だが、最初の「原因 *Cagione*」を観想して永遠の幸福 *eterna felicità* を明らかにする神聖なる諸学 *le divine [scienze]* の次には、わたくしが思うに、我々の現在の便宜 *comodità* と平安 *tranquilità* に最も密接に関わり、それらを目的とするような諸学こそが、何よりも推奨・従事・育成されるべきである。それらのうちで、「賢者 *Savj*」たちの共通した意見によれば、第一の重要な位置を占めるものが、ギリシア人が倫理学 *Etiche* と呼び、我々が道徳科学 *Scienze morali* と呼んでいるものであって、それは他のいかなる学にもまして、我々の品行 *costumi* と必要 *bisogni* とを間近に注視し配慮するからである。そして実際、これらの「学問」はあらゆる点で人間の改善を目指している。つまり、厳密に言われるところの倫理学 *Etica* は、人間を一般的に考察するものであって、我々の諸々の本能・感情・力の本性を明らかにすることによって、それらの錬成を促し、我々を善き生 *ben bibere* へと向けて形成すべく努めるからである。「経済学 *Economia*」は、家族の「長 *Capo*」あるいは「君主 *Principe*」としての人間に関連するものであって、家族をよく治め、家族のために徳 *virtù* や富 *ricchezze* や榮譽 *gloria* を獲得できるように人間を教育する。最後に、「政治学 *Politica*」は、人民の大いなる「父 *Padre*」あるいは「主権者 *Sovrano*」としての人間に関連するものであって、知恵 *iscienza* と慎慮 *prudenza* と人間性 *umanità* をもって統治にあたることを彼に教える。そのなかでも、支配下の国民 *nazione* をして、人口を増大 *popolata* させ、富裕 *ricca* で、勢力 *potente* あり、賢明 *saggia* にして、優雅 *polita* たらしめる諸規則を包括する分野が、「市民経済学 *Economia civile*」と称されよう。そして、立法の技術や、国家や帝国の保持の技術を含む部分は、単なる政略論 *assolutamente Tattica Politica* である。(Genovesi 2005, pp.261-263)

真っ先に「神聖な学」— 複数形だから形而上学も含むか?— が挙げられるのには当惑の向きもあろう。神学教授への道を阻まれたおかげで経済学へと転じたという経歴の持ち主のことであるから、神学は別格扱いということか、あるいは棚上げにする心算なのか真意は測りがたい。ただ、『正義論』では当然としても、『商業講義』の初版から第 2 版への改訂の過程においてもまた、「宗教 *religione*」の強調が目立つのは確かである。

倫理学・経済(家政)・政治の古典的な 3 区分が踏襲され、「政治学」の描かれ方には伝統的な「君主の鑑 *speculum principis*」の趣きさえ漂っているのだから、その主要部分を「市

民経済学」と訳すのは幾分そぐわない感じもするが、暫定的にお許し願いたい。それ以外の「単なる政略論」と訳した箇所の下線部は初版にはなく「単なる政治学」であった。ちなみに、草稿『商業原論』の時点では、「国民を巨大な家族、君主を共通の父ととらえ、人口を増大させ、国民を富裕で勢力あり賢明にして優雅たらしめるように君主に教える」のが「国家の経済 *economia dello Stato*」、《君主を、その人民の間に正義を維持するために生みだされた、支配者 *signore* や立法者 *lageslatore* や裁判官 *giudice* として考える》のが《経済と法術 *economica e dicastica*》と呼ばれていた (*Id.*, pp.3-4)。

ともあれ、《わたくしが先ず言っておきたいことは、政治経済 *economia politica* の目的は2つしかないということである。すなわち、1. 人口 *popolazione*、2. 便宜 *comodi*・富裕 *ricchezza*・勢力 *potenza*、である。したがって、商業の政治科学にも2種類ある》(Genovesi 1984, p.127)という「商業汎論」以来の認識は、『商業講義』第1部の導入節でも改めて〈市民の経済〉の2つの主要目的として確認される。だが、《ここから主権者 *sovrano* の最大限可能な富裕と勢力が生じるのである》(*Ibid.*)といった文言は消え、《「国家」を偉大と完成へともたらず》主権者の役割の方が強調される(Genovesi 2005, p.271)。

こうして、続く第1章「政治体について」では、《より小さな部分 *parti* から構成された機械 *macchina* をよく知るためには、[……]そのあらゆる部分と[……]それらの主要な動因 *motore* を知らねばならない》として、次のように述べられる。

あらゆる市民体 *corpi civili* は家族から構成され、家族は個人 *persone singolari* から構成される。個人は家族の要素であり、家族は市民体の要素である。したがって、政治体 *corpi politici* の性質や最初の力や活動は、家族の性質や力、そして個人の性質や活動から生じる。さらに、個人は、自然そのものから与えられた、生まれながらの諸権利をもっている。家族の諸権利は個人の諸権利から、その結集によって生じる。そして、政治体の諸権利、言うところの「公法 *jus publicum*」は、家族の権利から、分散状態にあった諸家族の最初の原始協約 *primo patto originale* によって生じる。個人は本性的にいくつかの責務 *obbligazioni* を負っており、それらは原初的な諸権利 *diritti primitivi* と不可分のものである。これらの責務は個人から家族へと移り、原始協約によって家族から政治体へと移る。全ての家族の長であり、したがって全ての個人の長でもある「主権者 *Sovrano*」は、ただ彼一人のうちに、これらの全ての力を集積し、これら全ての権利と責務の監督 *tutela* となる。これらの力や権利や責務の、彼は最高の独立した「調整者 *Moderatore*」であり、それは公共の福祉 *pubblica felicità*、すなわち組織 *corpo* 全体の各構成員とその長との幸福 *felicità* のためである。このようにして、「国家 *Repubblica*」の真の力と活動が形成される。 (*Id.*, pp.272-273)

下線部は第2版での加筆であり、また波線部は初版では単に「責務の監視人 *custodia*」だが、要するに「君主」とは「公共の福祉」のための「調整者」なのだ。では、その対象となる諸個人の原初的な権利や責務とは何か？

ジェノヴェージによれば、「権利」とは《我々に固有に *in proprietà* 属するところのものを自由に使用する道徳的能力 *facoltà morale*》であるから、《わたくしの本性 *natura* に属し、わたくしから分離できないものは全て、本来的にわたくしのものであって、二人の人間が同一人物とならぬかぎり、他人のものではありえない。したがってわたくしの自然的権利 *diritto naturale* に属する》ことになる。したがって全ての個人はまず何よりも「存在する権利 *diritto di esistere*」(生存権)を持ち、さらには「自らの幸福のために *per la sua felicità*」自信の能力を使用することもできる (*Id.*, pp.278-279)。だが、幸福の追求は往々にして逸脱を招く— 『正義論』ではスミスの『道徳感情論』のフェア・プレイ原則を想起させる議論も見られる(cf.奥田 2004)—、《……したがって、他人が自らの権利について行う濫用に反対できるということは、他と同様に一つの権利である。そしてここに政府 *governo* の自然的な基礎がある》 (*Id.*, p.282)わけだが、むしろ積極的に「扶助の権利 *il diritto del soccorso*」までも自然権のうちに数えるあたりこそ、ジェノヴェージの本領発揮といえよう。

◆〈相互的扶助〉と〈公共の信義〉

アリストテレス以来の《人間は本性的に社会的 (社会的)な *socievole* 動物である》という「ありふれた文言」にジェノヴェージは疑問を投げかける— 《動物と言えれば必然的に、感覚と知覚があり仲間のある存在 *essere sensitivo, cognoscente, compagnevole* のことを言うのである。第一に、どんな動物も両性の結合なしでは生まれぬからである》云々と。だか

ら、人間が優れて「社会的」であるとしたら、それが動物のように「本能 istinto」によるものではなく、「反省 riflessione」の結果だからである。「敬愛 PIETÀ」という《教育によっても損なわれない人間の心の本来の基盤》と、《我々の人生の目的に関わる無数の事柄の計算機 calcolatrice》である「理性 RAGIONE」のおかげで、人間はより強い絆を結ぶことができる。「自然」が《なんびとも自足しない niuno basti a se stesso》ようにさせたために「社会」が我々の幸福の最大の手段となったという次第もまた、理性によって認識される。

わたくしが言いたいのは、この理性こそが我々に、相互に扶助される権利 *reciproco diritto di esser soccorsi* というものを、したがってまた、必要な際に扶助し合うという相互的な責務 *reciproca obbligazione di soccorrerci ne' nostri bisogni* を明らかにするということであり、それゆえ、自然の動きを抑えて、お互いに必要であるのに扶助し合う用意や傾向のない者たちの間では、社会 *società* はありえないということなのである。(Id., pp.282-284)

〈相互扶助の義務〉の延長線上には、やがてフランチェスコ・マリオ・パガーノ(1748-99)の1799年の『ナポリ共和国憲法草案』の「人権宣言」第20条の「人間の義務」— 《万人は他人を啓蒙し *illuminare* 教育しなければならない》— が出現するであろう(奥田 2003c, p.9)。その予兆は既にジェノヴェージにもあった。《我々は研究しようではないか。学術的な虚栄のためではなく、無知な者たちを威圧しようという倨傲や、彼らを翻弄しようとする悪意のためでもない。我々に、互いに役立つ *utili* ように努めよと命じている、世界の「調整者 *Moderatore*」の法に従うために》(Id., p.890)— これが『商業講義』の最終句である。

ところで、その2-3頁前のところでは、「政治体」における「交通 *comunicazione*」の重要性が、改めて次のような比喻で強調されていた。

政治体というものは、連結管で結ばれた物体 *corpo di tubi comunicanti* のようなものである。交通のないところに社会はない。諸家族は交互にお互いを支え合い、全てが一緒になって、まさにこの交通によって主権 *sovranità* を支えている。交通の回路 *canali* を断ち切ってみたまえ。そこにあるのは連帯した組織 *corpo associato* ではなく、法もなければ長もおらず、お互いを貪り合う、分散して彷徨う未開人の群である。それは微塵に砕けた宮殿の廢墟である。(Id., p.890)

「交通の回路」には、道路や運河・港湾施設といった「物理的回路 *canali fisici*」だけでなく、「精神的回路 *canali morali*」も含まれる。どんなに立派な広い街道があっても、「恐怖 PAURA」「隷従 SCHIAVITÙ」「食欲 RABBIA」「横暴 AVANIA」「後悔 PENITENZA」「貧窮 MISERIA」などが蔓延っては何にもならない。ナポリ王国の現在はまさにそうではないかと問いたげなジェノヴェージであるが(cf. Pagden 1990)、問題はもっと根深い— 《公共の信義を侵犯するあらゆる財、あらゆる取引、あらゆる輸送は、国民を滅亡させる》(Id., p.890)。

だが、広汎で迅速な流通とあらゆる種類の有用な勤労 *industria* の復活にとって何にもまして必要なのは公共の信義 FEDE PUBBLICA である*。わたくしの信じるところでは、<ハリカルナッソスのディオニュシウスが『ローマ古代誌』第2巻で伝えているように>古代ローマ人たちの「法律 *Leggi*」と「宗教 *Religione*」の最初の制定者であったヌマ・ポンピリウスが「信義 FEDE」の女神に神殿を献げたことにもまして、市民的英知にふさわしい事績はない。キケロは慧眼にも<—重々しく『義務論』第2巻で>言っている。「国家を束ねるのに信義より強力なものはない *Nulla res vehementius Rempublicam continent, quam fides.*」と。誰が疑えようか？ ある「市民たち *Cittadini*」と別の「市民たち」との相互の信頼 *confidenza* を形づくる事柄においても、また取引の確実さや法律の効力や「行政官」たちの識見と廉直さや「宗教」の神聖さについても、<実際、>信義 *fede* が全く置けないようなところでは、市民的な社会 *civile società* や生活の最初の2つの基礎、すなわち正義 *GIUSTIZIA* と人間性 *UMANITÀ* は決して見いだすことができないだろう。なぜなら、信義のないところでは、取引の確実さもなく、法律の効力もなく、人間同士の信頼もないからである。(Id., pp.751-752)

これは『商業講義』第2巻第9章「公共の信義について」の冒頭部であるが、実はこの章は『商業原論』の草稿では「公共の信義についての論考」として第2部の最後を締め括る位置に置かれており、『大ブリテン商業史』の第3巻にも収録されていた。下線部は刊本『商業講義』初版で第2巻の中程の位置に移されるに際し加筆された部分であり、二重下線部はさらに第2版で追加された語句である。<>で囲んだ語句は「論考」にはあったが、『商業講義』刊本では削除された。なお、刊本では*の箇所には次の「注」が加えられている。

*このラテン語の《fides》という言葉は、ギリシア語の《sphidís》、「弦(corda)」、「絆(legame)」であり、ここから《sphigno》「結ぶ(allacciare)」が生じ、楽器の弦を絞って演奏する者はラテン語で《fidicen》、女性ならば《fificina》となった。したがって、公共の信義とは、一国の個人や諸家族をお互いにきつく結びつけたり、彼らを君主と、また交易する全ての国民ときつく結びつける弦である。この〈公共の信義〉論は、『商業原論』草稿での全 20 節が『大ブリテン商業史』で全 22 節となり、『商業講義』では最終的に全 33 節(初版では 32 節)に増補されるが、そこには— やはりバガーノの物理的社会観を先取りするような(奥田 2003c)— 次の一節もある。

孤独 soli であること、すなわち我々の同類 simli とのあらゆる交渉 commercio から隔離されていることにもまして、不幸と思われる人間の状態は他にない。アリストテレスの美しく真実な言葉にあるように、孤独で自分一人で満足する人間は、神か、さもなければ野獣にちがいない。生命と幸福を与えてくれる同類の息遣いなしで何ができようか？[……]この理性的な社会は、それを形づくる構成員たちが相互に真実の友人同士でなければ、存在できない。政治体における人々の間の相互的な友情 reciproca amicitia は、物体を構成する微粒子の間の相互的な引力 attrazione のようなものである。自然界の大きな物体はこうした相互の引力なしには存在しえない。友情なしにはいかなる政治体も存在しえない。 (Id., pp.762-763)

他人との「交渉 commercio」とりわけ「友情」がなくては、人間は生きていけない。そして今や「商業」がなくては〈文明=市民生活〉は立ちゆかない。そのとき「友情」に相応するものが〈公共の信義〉であろう。

だが、現実の商業世界の進展は、それをまさに踏みにじりつつあるのではないか？ 「商業汎論」以来、「奢侈」を基本的に容認し(奥田 1986-87)、「商業の自由」を擁護してきた(奥田 1987)ジェノヴェージも、懸念を深めていたはずである。第 1 巻冒頭の〈市民体〉論に呼応するかのようによ石として据え直された〈公共の信義〉論の拡充が、まさにそのことを語っているように思われる。

それでは『商業講義』の掉尾を飾る(?)「人間の幸福のための巨富の用途に関する論考」の場合どうか。『大ブリテン商業史』第 2 巻の初出時には全 42 節であったが、『商業原論』草稿(第 2 部第 14 章)では全 53 節となり、最後は全 85 節に膨れあがっているのだが、その複雑な改稿過程から何が読み取れるかは次の課題としたい。

Bibliografia(抄録) *全文は当日配布いたします。

- Bruni, Luigino (2006) *Civil Happiness: Economics and human flourishing in historical perspectives*, London: Routledge. 【『経済学史研究』49 巻 1 号に川俣雅弘会員の書評】
- Ferrone, Vincenzo (2003) *La società giusta ed equa. Republicanesimo e diritti dell'uomo in Gaetano Filangieri*, Bari: Laterza. 【『日本 18 世紀学会年報』第 22 号に報告者の書評】
- Pagden, Anthony (1988) *The Destruction of Trust and Its Economic Consequences in the Case of Eighteenth-century Naples.*, in *Trust: making and breaking cooperative relations*, edited by Diego Gambetta, Oxford: Blackwell, pp.127-141.
- Robertson, John (2005) *The Case for the Enlightenment: Scotland and Naples 1680-1760*, Cambridge University Press. 【『日本 18 世紀学会年報』第 22 号に村松茂美会員の書評。『経済学史研究』49 巻 2 号に報告者の書評】
- 奥田敬(1986-87) 18 世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成— アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論」とその周辺, 『三田学会雑誌』79-5, pp.58-72; 79-6, pp.89-102.
- (1987) 《商業の自由》の理念と現実— アントニオ・ジェノヴェージと 1764 年「大飢饉」, 『イタリア学会誌』37, pp.17-41.
- (1992) 【訳・解題】『アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論」— 商業についての一般的な論考(1757 年)』, 一橋大学社会科学古典資料センター(Study Series 27).
- (2003a) 〈市民〉と〈文明〉のあいだで— “Economia civile”の訳語をめぐって, 『一橋大学社会科学古典資料センター年報』23, pp.11-20.
- (2003b) イタリア経済思想史における啓蒙と改革— ナポリからの視点, 『経済学史学会年報』43, pp.87-101.
- (2003c) 賢者の革命— フランチェスコ・マリオ・バガーノ評注, 『甲南経済学論集』44-3, pp.1-34.
- (2004) 高貴な実学— アントニオ・ジェノヴェージにおける〈経済学〉の初心, 『甲南経済学論集』45-1, pp.77-107; 45-2, pp.59-109.
- (2006) 近代南イタリアにおける共和主義の運命— V.クオーコと 1799 年ナポリ革命, 田中秀夫・山脇直司編『共和主義の思想空間— シヴィック・ヒューマニズムの可能性』, 名古屋大学出版会, pp.383-417.